

---

# 不思議なヘッドフォン

HERON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議なヘッドフォン

### 【Nコード】

N2616D

### 【作者名】

HERON

### 【あらすじ】

コードもささずに下校中にヘッドフォンをつけている男を不思議に思っている男の話。

ここはごく普通の高校でごく普通の教室。でも、不思議なことが一つだけある。なぜか窓にいつもヘッドフォンがかかっている。持ち主だつて変な奴でもなんでもない。休み時間は普通にワイワイと友達と喋っている。普通に明るい奴だ。

不思議だ……不思議すぎる……なんでそんな奴が、下校のときはMDにもI podにも携帯にもコードをささず、ただヘッドフォンだけつけて下校してるんだ……そいつを知らない奴から見たら真性の変人ではないか……

かという俺も喋ったこともないんだよなあ……喋れば喋れそうだけど、あまりにもヘッドフォンから頭が離れず嫌われそうだしなあ。てか、なんで他の奴は気にしないでいられるんだ。俺って精神力足らんのかな……精神力あるほうだと思うんだが気のせいなのか……おっと話がそれてきた！話を戻せ俺。

とにかく、もう我慢ならない。聞いてやる。聞いてやるぞ俺。なんか決心すると妙にテンションがあがってきやがった。今ならいける！

「ちょっとごめん。聞きたいことあるんだけどいいかな？」

よし。聞いた聞いたぞ俺。頼む、無視だけはやめてくれよ……

「ん？ 何…なんですか？」

友達だと思ってたが、実は初対面の人だったから言葉の言い直しか。なんだか壁が見えてくるぜ……でも今はそんなの関係ねえ。俺

の体が聞けつて命令してんだから逆らうわけにはいかねえんだ。

「あの、ずっと前から気になってたんですが、なんで窓にヘッドフォンをかけてあるんですか？」

聞いた。やっと聞いた。達成感MAXだ。この達成感は、ドラクエで、はぐれメタルを初めて倒したときよりもあるな。

でも、周りの空気がやばいな……タブーに触れやがったこいつ。みたいな顔をしながら俺を見てやがる。まあ、これは承知の上だ。それよりも、大事なのは相手の反応だ。さあ、どう言葉を返す。

「えっ。もしかして興味ある？」

おっ。以外に上々な反応。周りもビックリってか。

「実は、ずっと前からそれが不思議で不思議でたまらなかったんです」

「そうかあ。まあ、いつか言われると思ってた。じゃあ下校の時に教えるよ」

よし。俺は危険なギャンブルに勝った。周りを見てもそうだ。さつきまで冷たい視線だったみんなが、今や羨みの視線に変わっている。それに、なんだか壁が無くなったように思えるぞ。零石二鳥って感じだな。なんだか本気で楽しみになってきた。今日は間違いなくハッピーデーだ。

ヤバい。楽しみで授業に集中できない。俺に当てるなよ頼むぜ先生。

「よし。じゃあここ海原<sup>かいばら</sup>。和訳してみる」

そう思うと結構当てられるんだよね……あるあるだねこれ。

「見てください。この雲を。毎日、形が変わってるでしょう。雲は日々変化しているのです」

かっかっか。ここじゃ普通は出来ない場面だけど、俺は出来ちゃうんだよね。

さて、授業も終わった。かったるい終礼も終わった。となると残すは最大のビッグイベント。謎のコードなしヘッドフォンの謎を残すのみだ。おっ。早速向こうからこちらへ来てくれたぞ。

「ごめん。ちょっと遅くなった。じゃあ早速外へ出ようか」

いよいよか。なんか緊張してきたな。廊下が長く感じるぜ……

「ほれ。これつけてみ。多分驚くよ？」

外に出ていきなりそう言われて、ヘッドフォンを手渡されたわけだが、驚くなんていわれたらハードル上がったなあ。これで滅多なことじゃ驚かないが果たして結果は……

うわ。なんだこれ。風の音や車や電車の音。鳥の鳴き声。外で話してる人達の話し声。子どもがはしゃいでいる足音や笑い声。いつも俺が聴いている音と何にも変わらない日常の音。でもなんでだろう。すげえ心地好い。なんでヘッドフォンからこんな音が聴こえてくるのかなんでどうでもいい。こんなに心地好いもんだったっけか日常の音って。

「なっ！？ 驚いただろ？」

「ああ。驚いた。初めはなんでヘッドフォンからこんな音が流れるのか不思議だったけど、今はなんでいつも聴いてる日常の音が心地好く感じるのかのほう不思議だよ」

本当にそうだ。別にヘッドフォンからどんな音が流れたって今の時代不思議じゃない。でも、いつもは雑音でしかない音が……

「俺もそれはわからんよ。でも、日常の音って毎日変化してるんだよな。風の音一つとっても、いつもは同じような音でも、ちゃんと聴いてみると微妙に変化してる。それが楽しくて毎日聴いてるんだ。やっぱり変かな？」

「変じゃないさ。なんか俺もはまっちゃいそうなくらいだぜ。毎日変化する音楽だろ？ 最高じゃん」

そういや、日常の音なんてちゃんと聴こうなんてしたことなかったなあ。確かに波の音とか綺麗な音だよなあ。ちよっとこれからそういうところにも耳を傾けてみようかな。

「そう言ってくれると嬉しいな。そうだ。今日これかしてやるよ」

えっ。かしてくれんのか。でも悪いよなあ……

「いいのか？ 大事なもんだろこれ？」

「いいよ。初めて共感してくれる人も見つけたしな。記念だ記念！」

おいおい。そりや多分……

「じゃあお言葉に甘えて借りるわ。記念だしな！ それによお。初めて共感してくれた人って言うけど、俺以外にも共感してくれる人いっぱいいると思うぜ。この話を広めたら行列が出来るな。俺が言うんだから間違い無しだ！ 金とつても並ぶけどな俺は」

「そりや言いすぎだと思うけど、なんかありがとな。もうなんか友達だな俺達！」

そう言うつと握手を求めてきた。なんか感動の瞬間！？ 俺は当然、握手に答えたさ。話しやすいしこないものまでかしてくれだし、拒否する理由全くなしだ。

そんで俺達は帰り道が違うので途中で別れた。当然俺は日常の音が聴こえるヘッドフォンをつけて帰った。なんかいつもよりも気分良く帰れた。

子どもの笑い声や風の音。鳥の鳴き声に癒された。外で話している人たちの会話で笑ったり、共感したりした。これも明日になるとまた変わってるんだろ。同じような日常でも変化してるんだな。

俺だってそうだ。いつもは毎日学校に行って学校から帰って家でゴロゴロする。休みの日は、バイトに行くか何か買いに行くか、友達と遊ぶか。それくらいしかない。でも、学校でだって話す内容も勉強する内容も違う。家でも、見るTVも違うし、家族と話す話の内容も違う。バイトも、買い物も、遊ぶときもそう。俺はいつも同じような日常でつまらないかと思ってた。でも、よく考えてみれば違うじゃん。俺だって変化してるんじゃない。

日常に耳を傾けるってのは大事なことなんだな。毎日、色々な変

化に。そして、自分の変化にも気づけるんだから。



（後書き）

変化なんて本当に気づかないものです。でも、当たり前の話かも知れませんが、間違いなく変化はしてるんです。毎日同じ出来事が起こるわけではないんですし。

でも、同じような日常が嫌で、何か違うことをしたくなるときもある。そういう感覚もあったりします。不思議だなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2616d/>

---

不思議なヘッドフォン

2010年10月26日14時55分発行